

知らされないとなかったことにされる

「特攻」

以前紹介した吉田千亜著『孤塁 双葉郡消防士たちの3・11』（岩波書店）が文庫本になりました。3.11の福島原発爆発事故のなかで救援活動に従事した福島県双葉消防本部125人のうち、その後も活躍している66人からの聞き取りです。「孤塁」とは陸の孤島となった小さな消防本部の姿です。

それまで他の消防署・隊員や特別高度救助隊のことは報道されてもこの消防隊の活動が取り上げられることはありませんでした。

3月15日夜、消防長から「イチエフの原子炉の冷却要請が東電から来ている。地域を守りたいし、俺たちしかいない」と出動を打診されます。隊員たちは反対します。「遺書」を書いた者や失神した者もいました。

翌日は朝6時、福島第一原発4号機で火災が発生したとの連絡が入り21人が出動します。養正テープに自分の名前を書いて他の隊員に背中にも貼ってもらって出発します。遺体となって発見されたときの識別のためです。残りの隊員が車両の両サイドに並んで敬礼する間を車両が1台ずつ出動していきました。

「特攻」です。

現場近くに着くと無線から「緊急避難！ 放射線量が急上昇している」と声が飛んで活動は断念され、“助かります”。

『本』は3月31日までのことを綴って終わります。

文庫のあとがきには、最初の出版以降の消防本部の様子が書き足されています。

その後の双葉消防本部はどうだったのでしょうか。本部は原発から20キロ区域内の避難区域内にあったため機能を緊急避難準備区域内の川内出張所に移します。住民がいなくなったので行政は機能しません。マスコミもきません。訪れるのは、“心のケア”のために精神科医たちくらいです。

そのひとり、精神科医で武蔵野大学教授の小西聖子さんが、6月なかばの双葉消防本部の状況を11年6月30日の毎日新聞に書いています。

122人が消防と救急を担当しています。小さな出張所だったために、車庫にテントを張って宿舎にし、身体を休める場所もなく、眠るのは2人に1つの簡易ベッドです。仕事を支えるシャワーや洗濯機もテレビもありません。消防車は外に裸で並べています。消防署の小さな玄関に放射性物資を持ち込まないために足を洗うブリキの盥や線量の測定機器

が置いてあります。

ほぼ全員が被災者で、家を失ったり、家族もばらばらです。衣食住のすべてが被災直後とさして変わっていません。一番近いコンビニまで車で40分。

放射能と避難の問題があるので、防護服を着て20キロ圏内で一時帰宅の人の支援と遺体捜索をおこないます。

消防には原子力災害特別措置法15条が発令されているので、非番の職員も常時招集できる体制が求められています。しかし孤立した中で何の支援もなく、非番でも常時待機という要求だけがおこなわれています。

文庫のあとがきに「孤塁」について説明があります。この状況については「自分たちかで発信するものではない」「誰にも知られていない」「理解されるものではない」ということです。

著者は最初の本を読んだ隊員から「知らせてくれてありがとう」とお礼をいわれます。

著者は、どうしてここまで危険な活動ができるのかの疑問を責任者にぶっつけます。

「消防という組織は、どこか特定の事業所に対して、何かの感情を抱く、ということはないんですよ。どこの事業所で傷病者が出ても、その人を助けに行くんです」

『本』に書かれていない実態、3月31日以降の状況については、双葉地方広域市町村圏組合消防本部のホームページ『双葉消防125名の軌跡 ～東日本大震災・原発事故対応の記録～FUTABA FIRE』(http://www.futabashobohonbu.jp/futaba_fire.html)に掲載されています。写真は生々しいです。

そのようななにあっても救援部隊は「要救助者が不安になるので苦しい顔を一切するな」が心構えになっています。原発事故から2～3年の間に、係長以上の職員のうち、約半数がうつによる休職をしました。

「ちゃんと吐かせられました」

消防庁は、阪神淡路大震災などの教訓をふまえ、震災、災害後における出動した隊員に対する“心のケア”の必要性和専門家の紹介・派遣を周知していました。しかし3.11においては当初、機能しきれませんでした。

福島原発事故に対する消防の活動です。

東京消防庁は、3月19日からハイパーレスキュー隊を派遣し、福島第一原発3号機の使用済燃料プールに対し、海水利用型消防水利システムと屈折放水塔車を用いて海水放水を実施します。

上司は最も危険な持ち場に立って隊員を指揮していました。これで部下は恐怖を安心感と信頼感で克服して作業を続けることができました。そして達成感をもって任務から離れることができました。

あわせて東京消防庁は、3月18日から21日まで、消防隊員の健康管理を行うため、



救急専門医を派遣しました。

隊が任務を終えて帰還したときには都知事が感謝の意を表し、慰労しました。組織は隊員を守るというメッセージです。隊員は組織への信頼と忠誠心を増し、その後の活動の支えになりました。

後日、ハイパーレスキュー隊のかたから体験談を聞く機会がありました。「ストレスを感じませんでしたか」と質問すると「ああ、惨事ストレスのことですね」と即座に受け止められ「東京消防庁はきちっと対応しています」、隊員1人ひとりが「ちゃんと吐かせられました」と回答が返ってきました。

専門家が隊員に体験したことを語らせ、体験交流をしてストレスを解消させていったということでした。

「今回の任務の活動方針は全員無事に帰ってくること！」

もう1つ。フクシマにおける神戸市消防局の活動を南三陸消防署・亶理消防署・神戸市消防局+川井龍介=編『津波と瓦礫のなかで 東日本大震災 消防隊員使等の記』（旬報社）に派遣された隊員たちの手記が載っています。

「午後4時15分には国（消防庁）から、最初の出動を打診する連絡がきた。しかし、その後なかなか出動指示が来ないので、独自に出動の準備を開始した。神戸市消防局としては、阪神淡路大震災で各方面から大変な応援をいただいたことから、こういうときこそ恩返しをしなければいけないという思いを皆がずっと持っていた。神戸市内で東北地方の地図を買い集めたり、燃料、食料、飲料、使い捨てカメラなどこの先必要と思われる物品の調達をはじめた。」

「陸上の部隊は最終的には11次まで派遣し、4月24日で終了した。航空部隊はその後5月14日まで活動を続けた。

これとは別に、福島第一原子力発電所の事故への対応として、3月29日から4月2日まで神戸市から『福島第一原子力発電所派遣隊』を派遣した。……

急きょ編成した派遣隊の人選については、年齢は考慮せず現場での活動能力を考えた。辞退する職員がいても仕方がないと思っていたが、実際は『自分が行く』と率先して皆手を挙げた。」

「3月23日、中央消防署3階会議室に福島第一原子力発電所への派遣隊員53人が結集した。

『今回の任務にたいする活動方針は、全員無事に帰ってくること！』

指揮隊長のこの言葉から我々に課せられた任務の危険性が切実に感じられた。

3月11日東日本大震災が発生し、当初、私は救助部隊の第4次派遣隊として被災地へ向かう予定であった。ところが出発2日前になって神戸消防局の震災対応が大きく変わることになる。国から福島第一原発への派遣要請があったからだ。任務の内容は原発事故の

初動で対応にあたった東京消防庁ハイパーレスキュー隊の作業を引き継ぎ、原子炉内の使用済み燃料プールへの放水作業をおこなうことであった。

私は普段、救助隊員として特殊な環境下で現場活動をおこなっており、防護服や特殊マスクを着装して活動することに精通していることから派遣隊員に選出された。当初は当然、迷いがあった。しかし誰かがやらなくてはならないことで、最初に話がまわってきた自分が任務を引き受けることが自然な流れだと割り切り承諾した。

派遣日までの間、放射能にたいする研修や現場対応の訓練が連日おこなわれた。出発の直前には東京消防庁ハイパーレスキュー隊へ出向き、福島第一原発で放水活動している特殊車両と同型の車両操作訓練もおこなった。

この間にも福島第一原発の状況は日々刻々と変化していることはテレビや新聞の報道で伝えられており、我々の想定している範囲での現場活動となるのか不安は募るばかりであった。『今やれることを一生懸命やろう』。そんな気持ちで自分を奮い立たせていた。そして3月29日、福島に向けて出発することとなった。」

「当時は原発そのものの情報が乏しく、私自身も特殊災害隊員として原発派遣に自ら手を上げたものの、不安感は非常に大きかった。しかしそれらの業務や不安感はさまざまな方々の協力により解決することができた。……

神戸市消防局と協力関係にある神戸薬科大学の安岡先生は、放射能に関する突然のメールや電話での質疑にたいして、迅速かついいねいな回答をしてくださった。また神戸大学海事科学研究所の原子力関係から専門の先生方を紹介していただいた。

神戸大学の小田先生は、原発派遣隊員にたいして講義をしてくださった。この講義のおかげで私自身も不安感が大きく拭われたし、他の原発派遣隊員も程度の差はあれ、きっとそうであったと思う。また北村先生は、我々とともに福島県まで同行し、寝食を共にしてくださった。現地での隊員の汚染検査時などでも的確なアドバイスをいただくことができ、非常に心強かった。また神戸大学研究基礎センターの宮本先生は、今回の派遣にさいして隊員の汚染検査用に、大口GM管式サーベイメーターを二機貸してくださり、わざわざ神戸市消防局まで持って来てくださった。……」

「我々の二の舞になることは起こしてほしくない」

『本』の最後のほうで、2018年に定年退職をした双葉消防本部の隊員が話します。「こういう思いを、二度と、誰にもさせたたくない。人間がコントロールできないものは、作ってはいけないと思います。……我々の二の舞になることは起こしてほしくないんです」

『孤塁』は3.11にどんなことが起きていたのか、被災地で、被災者でもある消防隊員が孤塁にとどまって活動をしていた「誰にも知られていない」「理解されるものではない」現実を知らせてくれました。

知らないとまた繰り返されます。もっとひどい災害が**起こされます**。

いじめ メンタルヘルス労働者支援センター